

高橋 治

ナマユウ

霧の恋歌
(下)

新潮文庫

さまよう霧^{きり}の恋歌^{こい うた} (下)

新潮文庫

た - 44 - 7



平成六年十一月一日発行

著者 高^{たか}橋^{はし} 治^{おさむ}

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式會社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 営業部(〇三)三二六六―五一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇

振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Osamu Takahashi 1991 Printed in Japan

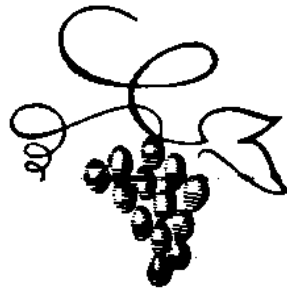
ISBN4-10-103917-8 C0193

新 潮 文 庫

さまよう霧の恋歌

下 卷

高 橋 治 著



新 潮 社 版

5356

目次

第六章	桔梗綻ぶ……………	七
第七章	琵琶歌う……………	九
第八章	逃げ水を追う……………	一五
第九章	斜光に浮かぶ……………	二〇
第十章	月澄み返る……………	二九

治先生と私

水谷良重

さまよう霧の恋歌

下
卷

第六章 桔梗ききようほ綻はなぶ

翌日、昼食のために仕事場を出る時に、柱に打った掛花の花が枯れていることに武部たけべは気づいた。

この日頃ひごろ、桐子きりこのことで慌あわただしい毎日を過している。そのため、つい見逃していたのだった。花と刀を研ぐことの間にはなんの直接的な関係もない。だが、心の備えとかゆとりとかで、欠けるところが出て来るように思える。早苗さなえがいなくなつてからは、なおのことそれが氣になり出した。

全く氣づかぬ中うちに、家じゅうの花が新しくなっているのは良いものである。一種の清々すがすがしさが胸の中にみたされる。武部もそうだが、早苗も花を量や種類の多さで見せることは好まなかつた。殊ことに、花器には殆ど眼配めくばりがきかない人間が、いかにも活いけましたぞという形の花を家の中に置くのは、他人事ひとことであつてもたまらない氣がする。花器に花を合あわす。あるいは家の中に持ちこみたい花をひきたててくれる花器を選ぶ。そうしてやつてこそ、初めて花が生かされる。

そろそろ、自分の山から移して来た三つ葉つつじが咲く頃だと思い、昼食後に鉢を持って庭に出た。門の内側の右に、生垣^{いけがき}を眼かくしにした畑がある。その奥の隣家との境いに、濃い紫の花が一輪揺れていた。澄みきった紫だけに、一輪でも目立つ。三つ葉つつじの花色には個体差があるのだが、この花はとり分け濃い紫に咲く。

木に近づいてみると、枝の先にずっと立った花芽が、いつせいに焦茶色^{こげちやいろ}の衣を脱ぎ捨て始めていた。

冬の間は枝のかほそさばかりが際立つ木なのだが、花が次々に開き、庭の一隅^{いちぐう}に紫色の雲がかかっているかと思える咲き方をする。そして、花が終ると、それを待っていたように、潔癖に三枚ずつの葉が、やはり衣を脱ぎ捨てて枝の先に立つ。若緑色のその葉色が、また、この木の限らない魅力でもある。ただ、枝が繊細に出来ている割に、三輪の花が三方に向いて咲く花冠が大きい。切り方によっては、バランスが崩れて花器におさまってくれない。大ぶりで口がすつと立ち上った李朝白磁^{りちよう}ときめて、武部はどこで切るかを考えた。

車が門の方に入って来る音がした。それが停^{とま}った。武部は振り向いて、門の方を見た。例によってきちんとした背広姿の寿三^{ひささぶろう}だった。寿三は一人の男を伴っていた。武部は寿三がなにか急な用事が出来て訪ねて来たに違いないと思った。

「ちよつと、お待ち下さい」

武部は寿三に声をかけ、ひと枝手近かな三つ葉つつじを切り、畑の隅^{すみ}に植えてあるぐみの枝に鉢を入れた。

座敷の床の間には、旅枕たびまくらという名で名高い形の、伊賀の筒状の壺つぼが出してある。客が玄関に上る間に、庭に面した廊下から廻まわって、その枝を投げこんでおけば、一応の様にはなる。熟したぐみと、青いままのぐみの色の対照も面白い。楽屋を見られてしまったようなものだが、寿三ならさしつかえあるまいと武部は考えた。ぐみとつつじを片手に持ち、武部は寿三たちが待っている門のところに戻りかけた。三十代の後半だろうか、あるいは、ひよつとしたら四十歳になっているのか、寿三の伴った男は年齢がつかみにくかった。

ひとつには恰幅かつぶくが良く、肉づきも良いせいもある。若い時分には、素人相撲しろうとで大関の地位にあったという寿三と並んでも、少しも見劣りがしない。チャコール・グレイのヘリンボーンの上下に、ごく淡いピンクのワイシャツを着て、銀色に寄ったブルーの縞しまのネクタイを結んでいた。総すべてがかなりな高級品らしく、服装には常に気をつかっている寿三も及ばない。

これは一体なに者なのか。武部は歩み寄りながら男の素性を考えてみた。

「どうぞ、お入りになって下さい。思いもかけないところをお見せしてしまつて」

武部は一方的な挨拶あいさつだけして、玄関に戻り、格子戸こうしどをあけた。

「どうぞ」

そこから振り向いて、二人に声をかけた。寿三がうなずいて、先に行けというように、客をうながした。客は丁寧に会釈えしやくを返し、いく分、振り返り気味に踏石を伝い始めた。二人の態度が改つたものでありすぎる。

“あるいは……”

そんな思いがちらと頭の隅に浮いた。だが、寿三の前夜の話では、桐子の身内であるといった人間は、女でしかかなりな年齢だということだった。この男であるはずがない。

手早く花をとり替えて、武部は玄関に出た。思った通り、二人は靴も脱がずに立っていた。「どうぞ、御遠慮なく。とり散らかしてはいますが」

武部はすすめて、二人を座敷に通した。正座した客の膝がもり上るほどにたくましい。大
学の頃に、なにか烈しいスポーツでもやった体に見えた。

「あ、こちらは」

寿三が紹介しようとした。

「岩渕です」

男は寿三の言葉尻に重ねるように名乗った。そして、内ポケットから出した革の名刺入れから、一枚の名刺を引きぬき、座ったままの体を一杯にのばして、武部の前に置いた。

「武部でございます」

答えたが、名刺は書斎と居間にしか置いてない。とりに立とうと思った時に、岩渕の次の言葉が続いた。

「今回のことでは、家内がいろいろとお世話になりました」

両膝についた腕の上で高く上っている肩の間に、岩渕は頭を下げた。

「は？……いえ」

武部の答えは、心ならずも曖昧なものになった。

「名刺を持って参ります、失礼します」

その場を取り繕って、座敷を滑り出た。そして、仕事場の手前の書斎に入り、手にして来た名刺に視線を落した。岩渕商事株式会社の社長で代表取締役という肩書になっている。だが、名刺からは他のことはうかがえなかった。武部の頭の中で、様々のことがかけめぐった。自分で名乗る以上桐子の夫に間違いはない。

見上げた視線の先で掛花の花が枯れていた。武部はそんな偶然にこだわる型の人間ではない。だが、今しがた、花のことに気づいて、その花を切りに出たところだけに、寿三に連れられて来た男が、桐子の夫だという事実は、心理的にかなり重圧感を伴うものだった。いい現わしようなない気持のすることである。消化出来ないものが胃の内部にどっかと腰を下してしまっているようにも思える。

桐子との間にはなにがあったわけでもない。確かにあるものは、桐子が武部を頼りきっているという事実だけである。しかし、それは、男と女である前に、人間として信頼出来るのか出来ないのかという、きわめて基本的な次元のことに思える。

あるいは、時間をかければ、女としての気持のありようも、男としての心のあり方も愛に変って行くこともあるだろう。いや、もうその領域に入って来ているのかも知れない。だが、現実としては、夫だと名乗った岩渕の視線を恐れなければならぬようなことを、武部は全く持っていない。むしろ、心理的にひけ目を感じなければならぬのは、岩渕の方だろう。

時間にすれば、せいぜい一分にもみたない長さだっただろう。武部の頭の中を色々なもの

が駈け違った。それらのことはそれらとして、武部は一札の名刺をとり上げた。そして、書齋を出ようとした。だが、いったんとって返し、枯れた花を屑籠くずかごに捨てた。

お腰のもののお預り処どころと書かれた武部の名刺を、岩渕はしげしげと見た。

「……これは珍しいお仕事で」

初対面のどんな人間に会った時でも、武部の名刺は話題を特殊な仕事の方に引きずって行ってしまう。

“お腰のものの話は、そこで止めにしておきましょう”

武部は無言の応対にそんなものを見せた。岩渕はそれを鋭敏に感じたらしかった。

「この度のことでは、家内がなんの御縁もない方に……」

岩渕はまた深々と頭を下げた。

「いえ」

答えながら、武部は一瞬妙なことを考えた。桐子の写真を見たわけでもない、桐子自身に会ったわけでもないのに、岩渕は自分の妻だと決めてかかっている。岩渕はすかさずつけ加えた。

「その、御厄介ごやっかいになった者が、家内に間違いないとわかったわけではございませんが、どうも状況をうかがいますと、そのように思えますので、こうして急いであがったわけですが」

「はあ」

「その上、なんですか、昨日はわざわざ名古屋までお出かけ下さったとか」

「はあ」

「お忙しい中を、御迷惑をおかけして本当に申し訳ございません」

岩渕の話の仕方には、一点の遺漏もない。だが岩渕が真先にいわなければならぬことを、まだ聞かされていないのが氣にかかった。それは、

「で、家内は無事なんでしょう。どこにも異常はなかったのでしょうか」というひと言である。

寿三は吉倉という老婦人に、桐子に特に肉体的な異常はなかったと伝えているはずである。だから、息をはずませて問い訊^たす必要はないかも知れない。しかし、病んでいるのが精神であつても病氣には違いない。場合によつては、肉体の病いよりも長びくだろうし、ある意味では根が深い。自分なら、なによりも先にそのことを聞く。武部はそう思った。

「この岩渕という男は、本当に妻の身を案じているのだろうか」
「そんな氣持にさせられた。」

「だったら、なにも、こちらから教えてやることはない」

意固地になるわけではないが、武部はそう考えてしまった。

「実は私も驚いているのです。これまでに、そんなことになる氣配は全くなかったものですから」

岩渕は誰に聞かすでもないいい方をした。

「それは驚かれたらうと思いますよ」

寿三がいった。武部が答えないでいるので、受けてやらなければ話のつぎ穂がなくなるからといわんばかりだった。さすがに、商売人なのだ。

「で、どうしておりましようか」

聞きながら、顔を武部に向けた。

「さあ……」

武部はそこで言葉を切った。そして、次にどういったものかを考えた。

「私にもわからないのです」

少々残酷ない方になるかとも思ったが、ほかに適当にぼかす表現もない。

「なにしろ、先生から新しい御指示があるまでは、私たちにも病院に行くのを遠慮した方が
良いという話なのですから」

いい終えた途端に、むかむかするものを感じた。

岩渕に腹を立てたのは他でもない。

秋乃の名が一度も出て来ないことなのである。初めての日に秋乃に会っていなかったら、桐子の問題は自分の手に余るものだったに違いない。泊める場所も寛^{くろ}がせる場所もないのだから、つまるところ、市なり警察なりの力を借りることになる。それらの機関も出来る限りのことはしてくれただろうが、人間的なぬくもりの点で、秋乃に追いつくわけがない。

症状の専門的なことはわからないが、平泉寺に現われた時の異様さが、更につのったかも

知れなかった。それを、とに角、現在の穏やかさに止めておくことが出来たのは、秋乃と桐子の間に強い信頼が芽生えたからである。寿三から大よその様子を聞いて来たものなら、秋乃の名が一度くらい出て来なければならぬ。

仮に自分が岩渕の立場なら、玄関で挨拶をすませて、先^まず秋乃のところに連れて行ってくれというだろう。そう考えると、一応、形だけは整えるという範囲から、岩渕が一步も出ていないような気がする。

「私にお礼をいって頂くのも結構ですが、真先に訪ねて行かなければならない方があるんじゃないですか」

よほど、そういつてやろうかと武部は考えた。

「恐れ入りますが」

岩渕がいった。

「はあ」

「病院の方に、武部さんから連絡を入れて頂くわけには行きませんかでしょうか」

なるほど、そういうことかと武部は考えた。入院している桐子に会うことが先決だと、自分の側のことばかりを、この男は見ているに違いない。

「私の顔を見たら、思い出せないことがいっぱいに戻って来る……まあ、そんな上手い具合には行かないかも知れませんが、案外糸口がほぐれて来たりはしないかと思ったりもするのです」